

めて疑問である。都市の集中巨大化、全国的なマス・メディアの発達による文化の均等化は、上方文化と江戸文化の伝統をつぐ関東と関西文化さえ、均質化しつつある現状で、横浜文化、神戸文化という言葉は独善にすぎるのかもしれない。現に横浜文化という意識はほとんどないであろう。

しかし、もしそのような全国均一の無性格な文化が、灰色にべったり日本中をぬりつぶそうとするとき、神戸にみられるような文化運動は大都市では珍しい現象である。均一的に知ることは、何も知らないと同じであり、均一に持つことは何も持たないのと同じである。そのような灰色の時代に対して、横浜文化という言葉が再び特色をもって語られる日があるなら、それはかつてのガス灯の時代が、光の華であったように、日本文化に新しい光を与える日となるであろう。

横浜文化論

分にすぎた背伸びを



吉田考古磨

<合唱指揮者>

日本にヨーロッパ音楽が移入されてからまだ1世紀に満たない。しかもヨーロッパでは何百年もかけて進展してきた音楽の成果がいっぺんに流れ込んだのだ。音楽だけが、いわば抽象的にとらえられて、それを支えているもの——西洋の音楽観——を無視してしまったから、いまだに「洋楽」は借りものといった意識がなくなっていない。ひろく「音楽」という意味でなら、日本にも「邦楽」の長い歴史と伝統がある。しかしその違いは、音楽が一国の文化の中で占める精神的な価値についての認識の差だといってよい。

最近、「生活の中に音楽を」ということがよくいわれている。また一方では専門家の中に「無意味な音楽の氾濫」を歎く声も多くなった。たしかに「生活」に結びついた音楽というのは、西洋の音楽観に一歩近づいたことになるし、少なくとも、日本のいままでの音楽の中に不足していたものの一つであった。しかしその理想的なあり方というのは、一部の専門家が指摘していたように、年中音楽が鳴りっぱなしという意味ではない。であるから日常生活のいたるところに音楽が満ち溢れている状態というのは本当は半分の真理でしかないわけだ。西洋では他人の生活を侵害しないという大原則と、生活第一主義はちゃんと守られている。日本ではどうだろう。最近の航空事故のテレビ実

況でバックに音楽を流して論議のまよになったり、騒音防止条例はあるけれど、ピアノやエレキブームでそのレッスンの音は無遠慮に侵入してきたりして、これでは音楽が、人間の日常生活を規制する独裁者みたいだ。「生活の中での音楽」というのは、究極的には、個人の心の問題として、音楽をいかに精神の糧にするかという、音楽を含めた芸術一般の、根本的な次元に還るのである。

先日、横浜市歌普及懇談会に、メンバーの1人として出席した。たまたま市歌に歌にくい個所があるところから、音楽としての価値論にまで及んだ。その中で、「市歌は市民のみんなに愛され、親しまれ、なによりも歌いよくなければならない。現代の感覚からずれているから、市歌としてその価値は認められない」という意味の意見がだされた。

横浜市歌は、開港50年記念として明治42年、森鷗外の詩に作曲されたものだが、作曲者は、東京音楽学校〈現、芸大〉をでられた方である。

近代日本が生んだ最初の《作曲家》といわれた滝廉太郎が、ドイツ留学のために横浜を立ったのが、明治34年ということを考え合わせれば、たしかにこの曲は古いわけだ。しかも、東京音楽学校に《作曲科》が設けられたのはそれより30年後の昭和6年というから、古曲を師匠から口づてに教わり、歌い奏することのみが音楽であるという邦楽の世界の考えが一般に通用していた時代である。その時代にこの曲は、当時としてずいぶんハイカラだったに違いない。また「市歌というものは、いわば一家の紋章みたいなものだ。たしかに、鷗外の詩で表現されている「横浜」のおもかげは、現在見るかげもないが、横浜の歴史の一端を表わすものとしてこのままでよい。現在もし変えたとすれば、これから先その時代時代の要求で変えねばなるまい」という意見もだされた。この

問題は単に市歌だけでなく、今回のテーマである「横浜文化論」にそのまま結びつくいろいろな要素を含んでいると思う。

統計によれば、戦後の昭和20年には62万人であった横浜の人口が、現在180余万人であるという。流入人口の急増によるいわゆる社会増が、その原因の大部分を占めているといわれている。

今、この人口を、文化のにない手としての横浜市民という考えから分析してみると、

- (1)横浜に住み、横浜を仕事の間としているもの
- (2)横浜に住み、仕事の間は横浜以外にあるもの
- (3)横浜以外に住み、横浜を仕事の間としているもの

に分けられると思う。(3)は、人口の数の上には表われないから、横浜市民ではないが、芸術などでは、本来コミュニケーションの作用が基盤にあるから、やはり文化のにない手といえよう。とくに東京という都市に顕著にみられる例であり、その影響力は非常に大きい。しかし文化活動の間として考えてみると、(1)が最も積極的にその機能を発揮させることのできる層だといえよう。

私は今日まで22年間横浜に住んでいる。そして、音楽を一生の仕事にしようと決心してからもう10年経っている。その時には、音楽を横浜を通して横浜文化の発展とか寄与するためにとか、そういうことは、正直のところ考えもしなかった。自分自身のためにその道を選んだのである。「音楽する」ために——。全ての芸術がそうであるように、音楽にはそのようなエゴイスタックな面を持っているのである。先日こういう話を聞いた。東京近県に住んでいて〈忙がしい時には東京でホテル住い〉、東京で仕事をしている人が、その仕事の業績に対して国からある賞をもらった。ところがそのことに対して、住んでいる地方公共団体から「当市の名誉であり、当市の文化に貢献した」

とってまた賞をいただいたが、何んだか場違いな感じがしたというのである。この人は、別に自分の住んでいる市のためと思ってしたことではないから、その申し出に対して、複雑な気持ちだったと思う。

そういう意味で私の場合、仕事の「場」が、「横浜」という地域にあるため、なお一層何らかのかたちで横浜の文化活動に影響を与えているということを、改めて自覚せずにはいられない。

一般に文化の伝達とか発展というものは、様式化を通してなされるものであるといわれている。古来、様式と呼ばれてきたものは、長年にわたって蓄積されてきたもの——文化の遺産——と、その時代時代の人々の生活の知恵が結晶したものの結果といえよう。

文化の育つ素地としての「横浜」を考えた場合、この《様式化》とはどういう意味をもっているのであろうか。

《様式化》——パターン——すなわち一つの「型」である。音楽についていうならば、いかなる地域においても、「音楽」そのものは本質的にかわらない。乱暴ないいかたをすれば「東京の音楽」とか、「横浜の音楽」というものはないのである。この「型」というのは、「音楽」そのものに対してでなくて、音楽を創り出す、育てる「わく」のようなもの、すなわち、「音楽環境」というべきものである。

最近、外国からぞんぞん一流の音楽家が来日して、横浜にいても、県立音楽堂のおかげで観賞できるようになった。ひと昔前は、東京まで行かなければならなかった。その東京も、文化会館ができたことによって、東京の音楽環境がずいぶん変わったのである。たった一つの良いホールが生まれたために、いろいろと良い影響が現われてくることは見のがせない事実なのである。横浜も県立音楽

堂の出現によって、音楽活動がずいぶん盛んになった。

そこで私は提案したい。一つの方法として理想型に近い拠点をこしらえることによって、大勢を一挙に大幅にレベルアップしようという、試みである。漸進政策でなくて、重点政策である。

それは、一つの目標のために理想的な環境を設定して成果を得るという試みだが、一つの典型的パターンを作り出すことが、いかに大きな影響を他に及ぼすかは、過去の事実からひきだせるであろう。

横浜の音楽界においても、そうしたことによって全体の水準を向上させる余地がまだまだ残っている。理想的な音楽堂、オーケストラ、オペラ、合唱団をともかく作ってしまうのである。音楽堂はもう一つあっても少しもおかしくないし、オーケストラはアマチュアであるため、市の援助が中途半ばだし、合唱団に至っては、連盟があっても、合唱活動は合唱団自身にまかせっぱなしである。なにもかも広く浅く、徐々に進歩を待つ方法よりも、場合によったら、分に過ぎた背伸びも、時には必要ではないだろうか。そして、それがなされた時に「新しい」ということばを使うとすれば、それこそそこに「新しい横浜の音楽文化」が開花するような気がしてならない。